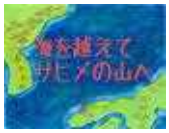
画像

①



②

③

語り

語り

創作民話朗読劇　（２０２５・６・４ 第１３稿　短縮版　ビラ朝山板）

「サヒメの大使命～海を越え石見の大地へ～」

この脚本は令和３年９月２３日、益田市グラントワ小ホール舞台で「しまね文芸フェスタ」発表用に、１２稿を約１２分に短縮した３校です。

令和７年６月４日ビラ朝山で発表

ギターの曲

出雲と石見の境に、ひときわ高い山がそびえています。千二百年以上も前に書かれた『出雲国風土記（いずもぐにふどき）』に、「佐比売山（さひめやま）」という名前で出てくる三瓶山です。標高１１２６メートル、石見富士とも呼ばれる美しいこの山に、いつの頃からか、こんな話が伝わっています。

ギター曲ＦＯ、劇中歌「小さな種」演奏曲ＦＩ。

むかし、むかし海のはるか向こうに、ソシモリという国がありました。そこに住む人たちは、草原に馬や羊を放牧し、粟（あわ）や稗（ひえ）、豆、麦、稲を育て、自然の中で穏やかな生活を過ごしていました。その国を治めていたのは、オオゲツヒメという女の長（おさ）でした。

豊かな実りの秋を迎（むかえ）た、ある日のことです。

騎馬軍団（きばぐんだん）が押し寄せる音がだんだん大きくなる。戦いを表す音楽。（馬頭琴など）

備考

・①は石見銀山の仙の山から眺めた三瓶山遠景写真

・使用したギター曲は、杉原俊範氏（大田高卒、東京在住）作曲演奏「石銀の里」より。

・語りは複数で分担してもいい。

・オオゲツヒメの表記

・ソシモリ（曽戸茂梨）は朝鮮の新羅という説が多いが、ここでは朝鮮を含め広く大陸とする。

⑤

⑥

⑦

⑧

大　将　　遠くから馬のヒズメの音が聞こえ、だんだん近づいてきました。

騎馬軍団が攻てきたのです。

向かってくる奴へ、いっせいに弓を放て！

家来たち　　**家にはみな火をつけろ！**

村の長はオオゲツというヒメじゃ。

このヒメは体から粟や稗、豆、麦、稲の種が出てくるそうな。

オオゲツヒメと娘は必ず生け捕りにするんじゃ。わかったな。

へえ！（強く）

語り　　戦闘状態を表す激しい馬頭琴の曲はつづく。

馬頭琴の曲はオオゲツヒメとサヒメの会話中つづく。

オオゲツヒメ　　**村の高台から、オオゲツヒメは戦いの様子を見下していました。**

大勢の兵士が、

奇声をあげながら押し寄せてきます。「もはやこれまで」と覚悟を

決めたオオゲツヒメは、サヒメを呼びました。

サヒメよ、あれを見てごらん。汗水流して育てた稲も、豆も、粟も、

みんな盗み、村を焼き尽くそうとしています。

・オオゲツヒメが騎馬軍団に襲

悪行のため高天原を追放された素戔嗚尊（スサノオノミコト）は、息子の五十猛命（イソタケルノミコト）とソシモリへ降った。

とめると、ヒメは、鼻や口、尻な汚い物を食べさせていたのかと怒り、ヒメを斬り殺してしまった。

すると、オオゲツヒメの頭から蚕が生まれ、目から稲が生まれ、耳から粟が生まれ、鼻から小豆が生まれ、陰部から麦が生まれ、尻から大豆が生まれた。

⑨

⑩

⑪

サヒメ　こわいよ、こわいよ・・・。

オオゲツヒメ　もうすぐここに押し寄せてきます。あなたはすぐ逃げなさい！

サヒメ　いやだ。お母さんと一緒にここにいる。

オオゲツヒメ　何をいうのです！一緒に死んだら、守ってきた五穀の種もみな無くなってしまうのですよ。

サヒメ　いっしょに、いたいよー、いっしょに・・・。

オオゲツヒメ　あなたはチビで泣き虫だけど、勇敢なお父さんと私の子です。私のいうことをよーく聞きなさい。陽がのぼる東には、むかし、祖先のイソタケルやツマズヒメ、オオヤヒメが海を渡って開いた国があるそうです。でも、山が火を吹いて、大変なことになっているそうです。その山を目指して海を渡り、この種を渡しなさい。どうして海を越えるの？

サヒメ　一緒に暮らしてきた赤雁が裏で待っています。

オオゲツヒメ　今から大切な神宝を授けます。目を閉てこう言いなさい。「天の大月日サヒメにふるえ、サヒメにふるえ」澄んだ心で唱えると、かならず願いがかないます。私は、どんな困難でも、あなたと一緒になって解決します。さあ、赤雁が待っています。その種を持って行きなさい！

遠い下界から合戦の騒音などが聞こえる。

・大陸の先進文化等は日本海を伝わってきたので、出雲石見には多くの大陸にまつわる神話伝

上陸し、木の種をまき各地に植（シズノイワヤ）は大国主命と少彦名命が国つくりの策を練っ

⑫

⑬

⑭

馬頭琴の曲、

語り　赤雁にのって空高く舞い上がったサヒメは、
宮殿が赤い炎を上げて燃えているのを見ました。
赤雁は別れを惜しんで、村の上 空を何度も輪を描いて飛びました。

サヒメ　おかあさーん。おかーさーん。

語り　草原を後にして、岩だらけの山を越え、深い谷を越え、大きな河を横切り、
緑の山を越えると、遠くに海が見えてきました。（風の音）
海の上 空にさしかかると、強い風が吹いてきました。

サヒメ　カリさん、苦しそうだね。大丈夫かい？

赤雁　なーに、これくらいへっちゃらさ。もう少し飛んだら風の流れが
変わって追い風になるよ。

サヒメ　風の流れが見えるの？

赤雁　あったりめえだ。長い間、あちこち山や海の上を飛んでるんだ。
風の道筋くらい読めねえと、カリなんかやってられませんや。

サヒメ　そうか、そうだね。ねえ、ねえ、海って、空まで続いてるんだね。

赤雁　なーにいってんだ。こんなの小っちゃいほうですぜ。

サヒメ　へえ！まだ広い海があるの？

いわれる表記法で表現した「あめのおおげつひさひめにふるえ」

・「古事記」「日本書紀」と並ぶ物部氏の古文書「先代旧事本紀」に十種神寶があり、物部神良由良止布留部」
ふるべ　ゆらゆらと　ふるべ」
を参考にした。

⑮

赤雁　あったりめえよ。こんなの、ちっぽけな湖（みずうみ）みたいなもんだ。

サヒメ　へえ！ちっぽけな湖？

赤雁　そうだよ。もう少しいくと島が見えてきますぜ。降りてひと休みしますかね。

語り　島の上空（じょうくう）に近づくと赤雁はゆっくり降りていきました。（効果音）

その時、島の中から矢のように飛び上がってきた大きな鳥がありました。

ワシ　無礼者（ぶれいもの）！断（ことわ）りもなぁのにわしらの島へ降りてくるたぁ何ごとじゃ。帰（け）えれ！

サヒメ　そんなことをいわずにちょっと休ませてくださいよ。

ワシ　ならんものはならん！帰（け）えれ！こかぁわしの縄張りじゃ。

サヒメ　この種をあげますから。

ワシ　なんじゃそりゃ。

サヒメ　種です。土に埋（う）めておくと芽がでて実がなります。

ワシ　そがぁなもん食えるか。わしゃワシじゃ、肉ぅ持ってこい。

そがすりゃ、ちょびっとくらい休ませちゃらぁ。

サヒメ　けちんぼ！

ワシ　なんじゃと！このわしを侮辱（ぶじょく）する気か！

はあ許（ゆる）さん。海地獄（うみじごく）へ送ってやる。（風の音）シェー！、シャー！

語り　鋭いクチバシを突き出して、ワシはどこまでも追いかけてきました。

・赤雁にとっては、日本海は小

・益田地方の伝承や各種の本では、赤雁は益田沖の高島や須津の大島に降りようとしたら、山祇（ヤマツミ）の遣いである

・

⑱

⑰　　⑯

命からがら逃げのびて次の島へ降りようとすると、
今度はタカの群れが襲いかかってきました。

強い風の音

赤雁　チビヒメさん、羽に力が入らねえよぅ。
サヒメ　ああああ、体が重い。ああああ、どうしょう、動かねえよう！ああああ。
ああああ、落ちる、落ちるよ・・・。
赤雁　「天の大月日、サヒメにふるえ、サヒメにふるえ」
サヒメ　ああ、軽くなった！
よかったね。サメが何匹も大きな口を開けて待ってたよ。

語り　海面すれすれまで落ちた赤雁は、大きな羽で風をつかみ、
一気に上空へ飛び上がっていきました。
そのまま飛んでいると、遠くに山が見えてきました。

サヒメ　あの山がお母さんがいった「海から見える高い山」かもしれない。
赤雁　じゃ、下りてみますか。
語り　赤雁は山の上空を旋回して、ゆっくりと舞い降りはじめました。
森の上まで下りてきた時のことです。
赤雁　あっ！いてててて。
サヒメ　どうしたのカリさん？

瓶山のこと。

・益田地方の伝承では、赤雁は益田赤雁の天道山へ降り、更に山）に降りて、そこで五穀の種

⑲

⑳

⑳

赤雁　ちくしょう。やられちまった。腹にささった矢を抜いてくだせえ。

サヒメ　いいかい。がまんするんだよ。やー！

赤雁　いて！

サヒメ　あああああ、落ちる、落ちる、落ちるよ～。

赤雁　つかまっててくだせえよー。あの草むらへ突っ込みますぜー。

サヒメ　ああああああ・・・

カミナガたち　エモノジャ、エモノジャ、ホッホホホッホッ

オオケナカリジャ、ホッホホホッホッ

ヒゲナガタチ　ドドドン　ドドドン　エモノジャ　エモノジャ

ドドドン　ドドドン　エモノジャ　エモノジャ

ヒゲナガの長　こりゃら！　その鳥ゃわしが落したんじゃ。

カミナガの女　違いますよ！あっしの矢があたったんですけぇ。

ヒゲナガの長　あほんだら！わしの矢があたったんじゃ。

カミナガの女　あんたやちゃ、いっつもそがぁして横取りぅしんさる。（しくしく泣く）

ヒゲナガの長　何ゅピチャクチャいうとりゃ！

ヒゲナガの女　いつんも、取られてしもうて、あっしらぁ、はぁ食うもんがのうて・・・。

を伝えたという。狭姫山は比礼振山ともいい、姫山神社が山頂にあり、金山姫、埴山姫、木花咲耶姫を祭っていた。三姫神社である。それがサヒメになった可能性もある。（ss説）

・カミナガがヒゲナガは伝承に徴している。

サヒメは縄文時代末期か弥生初期ころ稲作文化を大陸から伝える象徴的な存在である。

22

語り　草の陰に転げ落ちていたサヒメは、母にもらった呪文を唱え、
ヒゲナガの長の前へ出ていきました。

ヒゲナガの長　ありゃ？　わりゃどこから出てきたんなら、チビ。

サヒメ　ヒゲナガさん、弱い者をいじめちゃいけませんよ。

ヒゲナガ　なーにいってやんでー。この山にゃ、食うもんがなーだけぇ、
強いもんしか生きられんのじゃ。

サヒメ　それじゃ、いいものをあげます。この種を土にまくとたくさん実がなります。
世話をして増えれば、けんかをしなくても大勢の人が生きていけます。

ヒゲナガの長　・・なんじゃそりゃ。

サヒメ　これは稲、これは小豆、これは稗、これは粟。

ヒゲナガの長　ただの草の実じゃねえか。この丸いのはなんじゃ。

サヒメ　それは大豆。（ヒゲナガは口に入れる）ああ、食べちゃだめですよ。

ヒゲナガの長　ぺっ！ぺっ！ぺっ！　な～んじゃこりゃ！
おっどりゃ、毒の実ぅ食わしゃがったな！

サヒメ　大豆は生で食べちゃ苦いですよ。はははは。

カミナガの女　あのー、わっしやちに、ちょびっと分けちゃもらえんですかいのう。

サヒメ　いいですよ。土に埋め、水をやって大事に育ててください。

カミナガの女　ありがとごぜます。チビ姫様にいただいた、この小さな種を、
大事に、大事に、みんなで育てますけ。なあ、みんな。（「うんだ」「うんだ」）

２３

２４

ヒゲナガの長ばっかたれが。実がなって食やぁ、ゲロゲロ吐ぁて死んでしまわぁ。（笑い声）

語り　ヒゲナガたちが大笑いしている隙に、心の中で呪文を唱えたサヒメは、赤雁の背中に乗っていっきに舞い上がりました。上空に上がると追い風になり、風に身を任せて東の方向へ流れていきました。しばらくすると、海の向こうの空に煙りのようなものが見えてきました。

サヒメ　あれは、お母さんがいってた「火を噴く高い山」だ。きっとそうだよ。遠い海からも見えるってお母さん、いってたもん。

語り　赤雁は力いっぱい風をたたきました。空から見下ろすと、海の向こうの陸地はどこまでも山また山の波です。その緑の山並から、ぽつんと空へ飛び出ている高い山が、遠くにひとつ、近くには煙が立つ山が見えました。

サヒメ　見て見て。きれいな砂浜。イソタケルのミコトやオオヤヒメやサヒメたちは、あの海岸へ舟で着いたのかな。

赤雁　きっとそうですぜ。潮の流れに任せりゃ、このあたりに着くからよ。

サヒメ　あの山だね。なんだかカリさんが羽を広げて休んでるみたい。

・火を噴く高い山とは今の三瓶山。約４０００年前に噴火し、この時には、少し煙が立ち上っているという設定。

・遠くに大山(火神岳)、手前が三瓶(佐売姫山)、宍道湖、波根湖、五十猛や琴ヶ浜のきれいな砂浜も見える。

・ある角度から見ると雁が羽を広げて休んでいるように見える

・姫は女性の美称、高貴なというイメージや可愛いというイメー

25

26

27

28

赤雁　ハハハハ、おいらの気持ちが山に伝わったのかな、ハハハハ（一緒に笑う）

サヒメ　丸くて優しい、きれいな山だね。

語り　山の近くまで飛んできて、サヒメは驚きました。
山の真ん中が大きく窪んでいて、そこから煙がもうもうと立ちのぼり、
大きな木が黒焦げになって倒れたり、焼けたまま立っている大きな木も、
あちこちに見えました。谷や川には、大きな木が折り重なって倒れ、
溶岩が流れた跡が川のように海まで続いているのです。

サヒメ　これはどういうこと？

赤雁　山が火を噴くという話は聞いたことがあるけどよ、
こんなに近くで見たのは初めてですぜ。

サヒメ　あ、あそこに人が集まってる。どうしたんだろう。下りてみようよ。

語り　緑の木や草が残っている山のふもとの方へ、赤雁は下りていきました。
近づいていくと、村の人たちが集まっていました。
みな、やせこけ、目がくぼみ、座り込んで、うなだれていました。

サヒメ　どうしたのですか。

ジなど時代と共に変化。
う可能性も（SS説）

・三瓶山の室の内からは、まだ煙を吹き出していると想定。

29

村のオサ　見てのとおりでさぁ。草の根やら木の皮ぐらいしか食うもんがなぁだけ、子どもやら年寄ぁ、はあ何人も死んでしもうた。

語り　効果音

その時、足下の土が、もりもりと盛り上がってきて、

モグラのオキナが顔を出し、まぶしそうに目を細めていいました。

モグラのオキナ　どうか、この人たちぅ助けてあげてごしなせぇ。

この山ぁ、なんべんも火ぅ噴いて、こがぁに高い山んなった。

まんだ煙は出しちょうだが、はぁ火は噴きゃせん。見てごらんなせえ。

草もはえてきたし、木もだんだん大きゅなりよる。

サヒメ　ほんとうだね。この大きな山は、どういう山なの？

モグラのオキナ　むかし海の向こうから

オオヤツ姫、ツマツ姫がござらっしゃって、あちこちに木の種を

まきなさったげなけえ、「ヒメ山」いうたりしとりますだ。

サヒメ　お母さんが話してくれた人たちだ。（一人ごと）

モグラのオキナ　どうかこの人たちぅ助けてあげてごしなせえ。

サヒメ　モグラさん、この種をまくところがあるかい？

モグラのオキナ　黒土んなったとこもいっぱいあるけ、そこへまきゃええ。

サヒメ　ありがとう、モグラさん。　よーし、がんばるぞ。

抓津姫は五十猛へ上陸し、木や種を播いて歩いたという伝説が五十猛にある（和歌山にも）。物部神社あたりにはツマツ姫がきたという伝説もある。同神社境外社には漢女神社（カラメ）があり三女伸（タクハタチジ姫、イチキシマ姫、ツマツ姫）を祀っている。織物や海運、植林などの神である。

・三瓶町多根の佐比売山神社には大己貴命（オオナムチ、大国主命の若い頃の名前）、少彦名命、須勢理姫命を祀っている。

オオクニヌシがスクナヒコナと国土経営で出雲からサヒメ山

30

31

32

語り

カット

村人たち

みなさん！ここで、この種をまきましょう。この黒い土の中にこの種をまきましょう。食べられるようになったら、みんなここで生きていけます。

サヒメは、みんなを励ましたがや、先頭せんとうに立って木の根っこを引っ張り、土を耕たがやし、種の育て方を教えました。

モグラさんも、ひょろひょろミミズさんも大勢集まってきて、土を掘り起こし　柔やわらかくました。年寄としよりも子どもたちも、みんなで土を掘り、種をまき、一生懸命いっしょうけんめい、世話をしました。

「えーんやこりゃさっさ」吉川礼子作曲　洲浜昌三作詞

えーんやこりゃさっさ
えーんやこりゃさっさ
根っこを引き抜ぬけ　力をあわせ
えーんやこりゃさっさ
えーんやこりゃさっさ
みんなで引っ張ばれ　力をあわせ
えーんやこりゃさぅっさ
えーんやこりゃさぅっさぁのさ

の山麓へきて池をつくり原野を田畑に耕して稲種を植え農事を起こしたという。その神徳を仰いで神社ができたという。

・大田市静間町の海岸に海進洞窟・静之窟（しずのいわや）があり、オオクニヌシとスクナヒコナが国土経営の策を練ったという伝承がある（前述）。

・万葉集（巻3−355）に収められている生石村主真人（おいしのすぐりのまひと）の歌が静間町の静之窟ではないかという説がある。「大汝少彦名乃将座志都乃石室者幾代将経（おほなむ

33

34

35

語り　種をまくときも、世話をする時ときも、歌いながら仕事をしました。

村人たち　「小さな種よ」　吉川礼子 作曲　洲浜昌三 作詞

小さなた種よ　大きく育て
サヒメの水で　すくすくのびろ
いのちの種よ　希望の種よ
サヒメの空へ　大きく育て
いのちの種よ　希望の種よ
サヒメの空へ大きく育て

語り　みんなの苦労が実って、秋になると、稲は実をつけました。
大豆も小豆も、粟も稗も実りました。
子どもや年寄も、みんな畑や田んぼに出て収穫しました。

村のオサ　木の皮や草の根を食うて、どうにか生きてきたが、これからぁ
この種にょう増していきゃ、みんなで生きていける。ありがたいことじゃ。

村人たち　サヒメさん、ありがとう。（みんなで）

ギターの曲が入り、つづく。

語り　その時でした。子どもたちが空を見上げて、口々に叫びました。

どもたち　カリだ、カリだ、カリが山の上を飛んでいきよる！

語り　見上げると何百羽の雁が、列をつくって、山の上を飛んでいくところでした。

ち すくなひこのいましけむ しつのいわやは いくよへにけむ)」。邑南町にも静の岩屋があり、万葉集の「志都乃石室」説がある。

36

サヒメ　サヒメは、一緒に海を越えて来た赤雁をあちこちさがしました。
赤雁は、大きな羽を広げて山で休んでいました。
ここにいたのか。あのカリさんたちと飛んでいったのかと思ったよ。

赤雁　飛んで行きたいけどよ、チビヒメさんを置いて帰ったりしねえよ。
お母さんから、「サヒメを守れ」って、いわれたんだからよ。
でも、もう疲れた。羽が思うように動けねぇんだ。
腹の傷も痛むんだ。もう飛べねえ。ここで休むことにしたよ。

サヒメ　そうか。カリさんが、がんばってくれたから、ここまで来れたんだ。
ありがとう、カリさん。ゆっくり休んでいいよ。わたしも一緒に休むよ。
おかーさーん！カリさんと一緒に、約束を守ったよ！（
大切な種を渡して、みんなでまいたよ！
芽が出て、大きくなって、たくさん実がなったよ！
カリさん、お母さんに届いたかな。

赤雁　ハハハハハ、そんな小さな声で届くわけねえだろ。
大きな海のずっとずっと向こうの、そのまた向こうなんだからよ。

サヒメ　そうだよね。聞こえるわけないよね。ハハハハハ。（共に笑う）

赤雁、声を絞りだすように。

赤雁　オオゲツのヒメさま！泣き虫サヒメ、がんばり、がんばりましたよ！

音楽

語り　海の向こうへ届けとばかり、赤雁は声を絞りだしました。

37

・大陸のソシモリのオオゲツヒメへ届けとばかり叫ぶ。

毎年、稲や大豆や小豆や粟は育ち、種はあちこちへ広がっていきました。
いつの頃からか、山はサヒメ山と呼ばれるようになりました。
今も三瓶には「多根（たね）」とか「小豆原（あずきはら）」という地名が残っています。
そして、親三瓶、子三瓶の間には、「赤雁」という雁の頭のような山があり、
一羽の雁が羽を大きく広げて、静かに休んでいます。

音楽高まり、幕が下りる。

・平成26年1月12日午前2時30分、倉敷市西坂にて脱稿
・平成26年1月13日、題は『海を越えサヒメの山へ』推敲。絵を勝部和子さんへ依頼
・平成26年2月2日、大田市民会館中ホールで上演「三瓶の魅力を歌い語る」
・平成26年3月9日　浜田の石央ホール2回「石見演劇フェスタ」で上演
・平成26年2月5日～9日、冒頭から全面的に手を入れる　第4校
・平成26年8月30日、大田市民会館中ホールで上演。第5回「朗読を楽しむ」
・令和2年12月　DVD作成のために手入れ。追加の絵を石田和歌子さんへ依頼
『サヒメの大使命～海を越え石見の大地へ～』と改題
・平成3年1月31日第10校、市民会館企画で動画撮影（森脇彰氏、大ホール）、
・平成3年3月　脚本印刷（約百冊）のため、若干語句手直し、第11校。
・令和3年9月1日　しまね文芸フェスタで発表するために少し短縮　題12校
・令和7年6月4日　ビラ朝山で第3回目の依頼あり発表、短縮13稿板
（20250603洲浜昌三）

【参考文献】次のような文献や書物を参考にさせていただきました。

・三瓶山について（『島根の地名辞典』より　白石昭臣著

「大田市と飯石郡の一部にまたがる 休火山で、主峰の男三瓶山など環状をなす四山を総称し ていう。『出雲国風土記』にいう佐比売山のことで、サヒメが音転してサンベとなった。国引き神話での柱となった山であり、また太古、朝鮮半島からサヒメが切り殺された母より受けた五穀の種を携えてこの地に飛来し農業を広めたという死体化生伝承もある。サヒメは佐比売であるが、男三瓶と女三瓶の間に赤雁山、北麓に多根の地があり、また山麓八ヵ所の湧き水の地に佐比売山神社をまつっていて地区の発達の歴史がうかがわれる。 サは穀霊または砂鉄を示す語」

（著者は、昭和１０年大田市生まれ。高校教員、大田高校では洲浜も一緒に勤務したことがある。日本民俗学会評議員、日本口承文芸学会理事など）

・そしもり「曽戸茂梨」

曾戸茂梨については『日本書紀』 巻第一［5］第八段 一書第四のヤマタノオロチ退治の前段に記述がある

「一書曰 素戔嗚尊所行無状 故諸神 科以千座置戸 而遂逐之 是時 素戔嗚尊帥其子五十猛神 降到於新羅國 居曾戸茂梨之處 乃興言曰 此地吾不欲居 遂以埴土作舟 乘之東渡 到出雲國簸川上所在 鳥上之峯 時彼處有呑人大蛇

スサノオは子のイソタケルと新羅に降り曾戸茂梨に居た。スサノオ言うにはこの地に私は居たくない。埴土で船を作りこれに乗って東に渡り出雲国の簸川上にある鳥上之峯に至った」

・オオゲツヒメ（大気都比売）

高天原を追放された須佐之男命は、空腹を覚えて大気都比売神に食物を求め、大気都比売神はおもむろに様々な食物を須佐之男命に与えた。それを不審に思った須佐之男命が食事の用意をする大気都比売神の様子を覗いてみると、大気都比売神は鼻や口、尻から食材を取り出し、それを調理していた。須佐之男命は、そんな汚い物を食べさせていたのかと怒り、大気都比売神を斬り殺してしまった。すると、大気都比売神の頭から蚕が生まれ、目から稲が生まれ、耳から粟が生まれ、鼻から小豆が生まれ、陰部から麦が生まれ、尻から大豆が生まれた。 これを神産巣日御祖神が回収した。

島根県石見地方に伝わる伝説には、大気都比売神の娘に乙子狭姫がおり、雁に乗って降臨し作物の種を地上に伝えたとする。

・「乙子のちび姫さん　サヒメ」　（『益田の民話』より）

乙子狭姫（おとごサヒメ）

「島根県益田市を起点として、石見地方に広く伝承されている乙子狭姫（おとごさひめ）のお話。ちび姫の愛称もある女神。

元々は三瓶山の旧名・佐比売山に由来するが、益田市の比礼振山（権現山）周辺の地名説話を取り込んで生まれ、そこから石見地方全域に広がった伝説のようだ。

◆『乙子のちび姫さん　サヒメ』のあらすじ

ちび姫さんは雁の背に乗るほど小さい。乙子狭姫（おとごさひめ）という名で、オホゲツヒメ（大宣都比売命）の娘である。この伝承では、曽茂利（そもり―朝鮮の古地名）（正確にはソシモリか）の気の荒い神が、オホゲツヒメの体はいったいどんな仕組みになっているのか（オホゲツヒメの体をなでると作物の種が自由にでる）調べようと、ヒメを斬ってしまう。

息も絶え絶えのオホゲツヒメだが、「幼い（いとけない）お前を残して逝くのは心残りでならない。お前に千年も万年も尽きぬ宝をやろう」と言い残す。

悲しみにくれる狭姫だが、母神の遺骸から五穀の種が芽生えた。赤雁が舞い降り、旅立つことを促す。そこで乙子狭姫は雁に乗って旅立ち、途中、高島や須津の大島に降りようとしたところヤマツミ（山祇）の遣いである鷹や鷲に「我は肉を喰らう故、穀物の種なぞいらん」と断られてしまう。ようやく今の益田市赤雁町の天道山（もしくは比礼振山）に降り立ち、五穀の種を伝えたという話」

・「サヒメ山」「三瓶山」の名前の由来について

今は、「三瓶山」と呼ばれていますが、なぜそう呼ばれるようになったのか、何故、「佐比売山」（サヒメ）と呼ばれたのかなど、いろいろな説があり、それぞれ歴史の背景があり興味深いものがあります。主なものを紹介してみましょう。

三瓶山の古名は、佐比売山、形見山、片三山などいろいろな呼び方があったそうです。しかし、７３３年につくられた**『出雲国風土記』には、「佐比賣山」と出て来るの**で、歴史的なエビデンスとして唯一確実性がある名前です。

なぜ「さひめ」なのか。伝承では、**雁に乗った小さな「さ姫」が大陸から渡ってきて、三瓶で種をまいた**ことから「さひめ」と呼ばれるようになった、というものですが、確証はありません。ぼくの推測では、国学が盛んになった江戸後期に、『古事記』や地名などから連想して、神官か国学者が語ったものが、伝承となったのではないかと思います。

三瓶山は、なだらかで丸みを帯びた三つの峰で、とても優美で優しい感じの山です。山を神として崇めるのは日本人の自然観、宗教観です。**神話に出て来る気品のある「姫」（女性の美称）を連想して、「三姫」←「サンヒメ」←（ンは無音化し）「サヒメ」になった可能性**もあります。

言語学的には、「さひめ」の「さ」は、「小さい、とか可愛い」という語感があり、民俗学的には、農耕を意味するとされています。「早苗」「早乙女」、「早霧」「早月」などの「さ」です。**「さひめ」は、農業に関わる姫、を象徴**しているのかもしれません。縄文時代後期に大陸から稲作が伝わって来たと言われています。「さ姫」が種をまいたという伝承は、「大陸からの農業や文化の渡来」を象徴している気がします。佐比売神社は益田に一社、大田に七社あり、**砂鉄や鉱山との関係があるという説**もあります。

「さひめ」が何故、「さんべ」に変ったのか。これにもいろいろな説があります。「さひめ」の音が変化して「さんべ」になった、という説もあります。

歴史的な事実としては元明天皇の**和銅六年（７１３）朝廷が「好字二字令」**（「機内七道諸国郡郷名著好字令）を命じています。先進国である中国から漢字を取り入れたのですが、中国の地名は二字表記でした。当時の日本では「やまとことば」の音を漢字に当てはめて表記したので、万葉集でも古事記でも様々な漢字で表記されました。

例えば「やまと」は、倭、大倭、夜麻登、野麻登、也麻等、八間跡。それを「良い意味の二字」に変えて統一し「大和」としました。そういう例は全国にたくさん見られます。**「好字二字令」が出されたこの前後に「佐比賣」が「三瓶」になった可能性**は大いにあります。しかし、文書や記録として確認できないので、あくまで「可能性」です。

県立三瓶自然館サヒメルの学芸員・中村唯史氏は、次のような説もブログで紹介しておられます。

「三瓶山の名前の由来とされる**「三つの瓶（かめ）の物語**がある。物部神社に伝わる話では、主祭神の宇摩志麻遅命（うましまじのみこと）が石見の国を平定した時に三つの瓶を物部神社（一瓶社）、浮布の池（邇幣姫神社）、三瓶大明神に奉納したという。ほかに、**三瓶山から飛び出した三つの瓶が同じ三箇所に納められた**というバージョンもある。これとは少し異なる物語で、西から見た三瓶山が瓶を伏せて三つ並べたように見えるのが名前の由来というものもある。農耕の神「サンバイサン」で、「さんべさん」の音と大変よく似ている。物部神社の御田植祭では、三瓶山からサンバイサンを招いて一年の豊穣を願う。祭りでサンバイサンの役を担うのは小さな女の子である。小さな姫君「さひめ」にイメージが重なるではないか。

「さんべさん」の名が「サンバイサン」に由来するものであるなら、佐比賣山、三瓶山のいずれも「農耕の姫君の山」を意味していることになりそうだ。農耕の神が宿る地としての古くから信仰が、佐比賣山と三瓶山の名を生んだのかも知れない」（中村氏のブログ、［おーい、中村です］より）

「さひめ」という一つの名前が、歴史や文化、思想、言葉、産業、宗教、民族の志向、自然観などなど深いものを背景に背負っていて、空想や想像が限りなく広がり、物語が生まれてきます。それを活字にし、言葉や体を使って表現する―文学や芸術の面白いところです。

（20210318　洲浜昌三）

◆参考文献

・「出雲・石見の伝説　日本の伝説48」(酒井董美, 萩坂昇, 角川書店, 1980)
・「出雲国風土記　全訳注」(全訳注 荻原千鶴, 講談社学術文庫, 1999)
・「石見鎌手郷土史」(矢冨熊一郎, 1966)
・「石見の民話　第二集」(大庭良美／編著, 未来社, 1978)pp.97-99
・「角川日本地名大辞典 32 島根県」(角川書店 1979)
・「郷土史家人名事典　地方史を掘りおこした人」(日外アソシエーツ, 2007)
・「口語訳　古事記　完全版」(三浦佑之, 文芸春秋, 2002)
・「江津市の歴史」(山本熊太郎／編著, 1970)
・「三瓶山　歴史と伝説」(石村禎久, 1984)
・「式内社調査報告第二十一巻 山陰道4」(式内社研究会／編, 皇学館大学出版部,1983)
・「島根県益田市民話集」(島根大学教育学部国語研究室／編, 島根大学昔話研究会1991)
・「島根の神々」(島根県神社庁, 福間秀文堂, 1987)
・「島根の伝説」(島根県小・中学校国語教育研究会／編, 日本標準, 1981)
・「島根評論　第4巻上　第6号(通巻第33号)」(島根評論社, 1936)
・「島根評論　第13巻中　第6号(通巻第141号　石中号)」(島根評論社, 1936)
・「神祇全書 第5輯　※藤井宗雄『石見国式内神社在所考』所収」(思文閣, 1971)
・「神話・伝説・史跡巡り・人物伝の一端　川平・松川地区および江津市内各地の歴史」(佐々木春季／編著, 1988)
・「随筆　石見物語(復刻版)」(木村晩翠, 白想社, 1993)pp.230-231
・「角鄣経石見八重葎」(編集・発行者 石見地方未刊行資料刊行会, 1999)
・「伝承怪異譚」語りのなかの妖怪たち(三弥井民俗選書)」(田中瑩一, 三弥井書店,2010)
・「那賀郡史」(大島幾太郎, 大島韓太郎, 1970)
・「日本神名辞典」(神社新報社, 2001)
・「日本伝説大系 第十一巻 山陰(鳥取・島根)」(野村純一他, みずうみ書房, 1984)
・「日本の神々―神社と聖地　第七巻　山陰」(谷川健一／編, 白水社, 1985)
・「畑作の民俗」(白石昭臣, 雄山閣出版, 1988)
・「益田市誌 上巻」(益田市誌編纂委員会／編, 1975)
・「歴史の落穂拾い 出雲・石見」(石村禎久[勝郎], 石村勝郎, 2000)
国立国会図書館・近代デジタルライブラリーにて確認
・伴信友「神名帳考証」・鈴鹿連胤「神社覈録」・栗田寛「神祇志料」
・「さくらサヒメのおおしごと」古田足日・文　福田岩緒・絵(童心舎刊)
・「石見出雲　幻の神話」(石村勝郎著　俳誌石見発行所　昭和五十一年)
・「三瓶の史話」(石村禎久著 大田市観光物産館 昭和四十二年発行)
各種ホームページの記事
・「おーい!中村です!」・「狭姫と巨人」・「薄味　乙子のちび姫さん」
・「ウイッキペデア　・オオゲツヒメ　・乙子狭姫　・佐毘売山神社　などなど」

この脚本は、島根県石見地方の伝承を基に朗読劇用に創作した第十一校版です。大田市民会館で「三瓶の魅力を語り歌う」「朗読を楽しむ」浜田市で開催された「石見演劇フェスタ」で劇研「空」が上演しましたが、そのたびに手を加えています。令和三年一月に大田市民会館の企画で動画に撮影し銀山テレビで放映、DVDを関係者に贈呈しました。脚本使用は自由です。DVD共に、大いに利用してください。

印　刷ー２０２１年３月２５日
発　行ー大田市演劇サークル 劇研「空」
代　表ー洲浜昌三（TEL0854・82・3040）
〒694・0021島根県大田市久利町行恒３９７